

一九九四年

第九回十亀記念会  
第八回十亀賞記録

十亀記念事業委員会



〈講演〉

# 自閉症の人々の心の発達とその援助をめぐる

東海大学教授

小林 隆 児

はじめに

ご紹介いただきました小林でございます。本日は十亀記念会という栄えある会で話をする機会を与えていただき大変光栄に思っておりますが、かなり緊張しております。

私は十亀史郎先生を直接にはあまりよく存じ上げませんでした。といいますのも、十亀先生が亡くなられたのは一九八五年（昭和六十年）ですが、当時私は自閉症研究のひとつの仕事で学位論文としてやっとまとめて、その年の八月にある雑誌に発表しました。十亀先生は九月に亡くなられましたので、私の拙い論文はおそらく十亀先生の目にはふれずじまいだったろうと思います。したがって、私は自閉症研究の世界では十亀先生とはちょうどすれ違いの関係にあったこととなります。私自身はそのことをとても残念に思っていました。



## 一、自閉症の子とも達との出会い

私と自閉症の子とも達との出会いは昭和四十五年、二十歳の時でございます。学生ボランティア活動で自閉症の子とも達とめぐり合ったわけです。それから今日まで二十五年近くこの道にどっぷりと浸かりまして、この世界の魅力にとりつかれた人間なのですが、自閉症の子どもの療育キャンプにも九州・山口地区で二十年間私なりに関わって参りました。思い起こしてみますと十数年前の夏の療育キャンプの時にゲスト講師として十亀史郎先生をお招きし、その時の夜のシンポジウムで私の左隣に座っておられたことを思い出します。残念ながらその時は先生とほとんど対話を思い出しません。残念ながらその時は先生とほとんど対話らしい対話はしていなかったように記憶しております。あまりにも偉大な先生であったので当時の私には近寄りがい存在だったからだろうと思います。十亀先生のお話を直接そばでお聞きすることができたのは、ほとんどこの時だけであったと思います。その時に先生は雑談の中で「最近、指輪が抜けなくてね」と何気なくおっしゃっていましたが、きくとその時にはすでに体調がかなり悪かっただろうなと思います。十亀先生についてはそのような思い出が今、鮮明に浮かんできます。

## 二、自閉症の療育ボランティア活動「土曜学級」での経験

記念会の事務局の方から自閉症の子どもの心の発達について話をするようにとご指示を受けまして、その時は軽い気持ちで今回のようなタイトルに決めたのですが、後で十亀先生の講演集を読みなおしてみますと、丁度十亀先生が亡くなられる年の最後の講演が「自閉症児者における心の発達」というタイトルであることを知りました。偉大な十亀先生の足元にも及ばない私が同じようなタイトルでお話をするのはとても大変なことになってしまったと次第に思うようになりまして、随分とプレッシャーを感じております。ともかく私が今一番思いを強くしていることについてお話をさせていただきます。

私は医学部の学生時代の二十歳の時から自閉症の人々と出会ったものですから、当時はほとんど専門的知識を持ち合わせていませんでした。ただボランティア活動として一生懸命関わったものですから、医学の勉強は随分手抜きをしていたように思います。専門的知識をほとんど持たずに彼らと接することができたということは、今振り返ってみますと、私にとってはとても貴重な体験をしたものだと思しううれしく思っております。予断と偏見を持つことが少なかったのだらうと思います。また自閉症という粹で見る

ことも少なかつたと思います。

当初、私はセラピストとして一対一で自閉症のお子さんを担当していたのですが、私が子どもを担当すると、なぜかその子どものご両親が離婚されたり、交通事故でどちらかが亡くなられるなど、不幸なことが重なるということが続きました。どうも私が担当すると、そのお子さんに不幸なことが起こるのですね。そのため私は随分と落ち込みました。何か自分は因果な存在なんだなと思いました。私が参加していた自閉症の療育ボランティア活動「土曜学級」は当時、九州大学医学部附属病院精神科外来で行われていました。池田数好先生（当時九州大学教育学部教授、後に九州大学学長になられました）と村田豊久先生（当時九州大学医学部精神科、そして福岡大学医学部助教教授になられ、その後児童精神科のクリニックを開業され、現在は九州大学教育学部教授でおられます）が中心的指導者としていらっしやいました。子ども達への働きかけはマン・ツー・マンを基本にしながらも集団療法的構造の中で、子ども達の心を揺り動かしていこうという狙いをもって行われていました。基本には一対一の治療的関与を持ちながらも、一種独特な治療的雰囲気（当時は「阿波踊り方式」と呼ばれていました）を活用して彼らの心に迫っていこうと考えたわけ

です。私はマン・ツー・マン担当のセラピストに向いていないのではないかと思います、ある時から集団療法を進めていくグループリーダーをやるとうと決心しました。周囲の人々の勧めもあって、遊びのインストラクターが自分には向いているのではないかと思うようになりました。以後、集団の中での彼らとの関わり合いが私の活動の中心になってきました。

今、振り返ってみますと、この時の体験というものが私の自閉症理解に根深い影響を与えているなど、最近になって特に強く感じています。それはどのようなことかと申しますと、私にとって一対一では彼らの生々しい姿の一面しかなかなか捉えがたいところがありました。しかし、集団療法の場という一種独特なグループダイナミックスが形成される場の中にあると、びっくりさせられるような行動を彼らはわれわれに見せてくれます。九重の山奥で三泊四日の療育キャンプをやっている時に次のようなエピソードがありました。療育スタッフの中にとてもエレガントでエキゾチックな若い女性セラピストがいました。ある時、彼女を含めたグループが集団遊戯でおしくらまんじゅうをやり、みんなで大騒ぎをしていたんです。するとある自閉症の子どもがおしくらまんじゅうでみんなが重ね合わさっている

時のどさくさにまぎれて、その女性にスキンタッチをしているんですね。その姿を私はとても興味深くみていました。とても人間的な振る舞いをするんだなと思いました。開放的な治療的雰囲気の中になると、彼らも自分というものをとても素直な形で表現するんだなと思ったのです。こうした姿を発見してから、マンツーマンではなかなかこちらの働きかけに乗ってこない彼らも、一種独特な治療的雰囲気の中ではそれに引き込まれるかのような形で彼らが遊びの中に入ってくることを私は学びました。このようなことを集団療法のリーダーをしていってしっかり教えられたように思います。

このことはどういうふうな理解したらよいのでしょうか。この子ども達の自我の発達という視点で考えた時に一対一でのこの治療関係を大事にするというのにはある意味で、セラピストは自閉症の子ども達の代理自我の役割を果たしているといえるでしょうが、その他、集団の中でさきほど話したような動きが彼らの中に見られるというのは、集団の中で一種独特な雰囲気が生まれ、それによって子ども達も動かされていくんですね。当時はそのような力を集団自我（グループ・エゴ）という言葉で表現していたと思います。なぜ彼らがそういう形で集団の中になると普段とは違っ



た姿を見せてくれるのだろうか、以来こうした疑問を私はずっと持ちつづけていたように思います。それは彼らに対する治療的接近を考える上でとても重要な要素だろうと感じておりました。その後、ずっとよくわからないままできていたんですね。

### 三、自閉症の人々の思春期発達—前思春期—

大学を卒業後も精神科医という職業アイデンティティの

もとで彼らと今日まで付き合ってきました。彼らも成長してきて、ほとんどの子どもは思春期・青年期から成人期に達しています。そのような発達経過とともに歩んできたことので、必然的に彼らの思春期発達とともに歩んできたことになります。彼らの思春期発達の中で治療的関与をしなから、その中で教えられたこと、感じたことを通して、彼らに対する援助を考える時に、ということが大切かをこれから私なりにまとめてお話しをしてみたいと思います。

思春期発達ということを考える際に、まず彼らが大きな変化を見せはじめるのは、前思春期、つまり小学校高学年の時期です。思春期に差し加かったこの時期に彼らは子ども返りという現象をみせるようになります。多くのお母さん方はこのことに気づいておられると思います。幼児期にはあまり親に甘えるという感情や行動を示さなかったにもかかわらず、この時期になると強い依存欲求、甘えの欲求をいろいろな表現して見せてくれます。

親にとっては子どもが甘えてくるのを知るのはとてもうれしいことなのでしょうが、この頃になると大半の子どもは母親の身長を追い越してしまっています。親と同じかそれより大きい身なりをした子どもが自分に赤ん坊のように甘えてくるというのは親にとっては戸惑いの感情を引き起

こさざるをえないと思います。喜びの感情とともにどこかで拒否したくなるような戸惑いの感情が同時に起こる、複雑な心理状態を引き起こすことになります。このような状態になると、それまで曖昧に過ごしてきた様々な親子間の情緒的な問題がこの時期になってあらわになってくるということがあるような気がします。そのことがうまく収束していかない場合には、思春期のこの時期に親子間で複雑な情緒的混乱が再度引き起こされ、問題はどんどん肥大化していくことがあると思います。この時期の親子の関係の変化を見てみますと、十亀先生がよくおっしゃっていた非言語的世界、言葉の成立する以前の、言葉のない世界、つまり情緒、情動というものがより重要性をもつ世界で、親子が揺れ動く、思春期とはそういうことを目の当たりにする時期であるともいえるでしょう。そうした中で、彼らはいろいろな反応を示すようになり、われわれはそれを症状として表現したりしています。子どもにみられるこのような症状に対して治療的働きかけをしようとする、どうしても今、お話ししたような親子間の非言語的世界、つまり情動という一種どころどころとした世界に足を踏み入れて、そうした側面を直視していかないと治療的展開がなかなか開けないということ、多くの子ども達の治療の中から学んで

きたように思います。

#### 四、自閉症の人々の思春期発達―仲間体験―

そういう意味では思春期の発達においてはこのようなことが最も鮮明に現れてくる時期といっていいでしょう。母子分離の後に交友関係、仲間関係を作っていくということがこの時期の重要な発達課題となっていくますが、自閉症の子ども達にとって同世代の同性の仲間、男同士、女同士という関係を作っていくことは至難の技なんです。したがって、彼らにとってはこのような発達課題はほとんどといっていいほど達成困難な課題として眼前に立ちふさがっています。その際、彼ら独特の特異的な反応を示すことが多いように思います。なかでも驚かされたのは、ある少年が仲間関係の中で非常な心理的緊張を強いられ、ついには強い恐怖状態に陥つたのです。彼は自閉症に認められる発達上の問題を当時はほとんど克服して一見したところ問題のないほどの段階に達しておりました。しかし、驚いたことにそうなってしまうと、彼がそれまで確実に獲得していたかに思われていたある種の認知能力がとても脆いものであることに気づきました。今まで理解できていたと思われることが急に分からなくなってしまうたり、歪んだ形で受け止めてしまうようになるんだということを私は発見しま

した。深刻なストレス状況に陥ってしまうと、今までに獲得していたと思われるような能力が意外と確実なものではなく、とても脆弱で不安定なものであるということを知ったのです。

#### 五、自閉症の人々の思春期発達―第二次性徴―

身体図式、つまりボディ・イメージというものが思春期の変容過程で強く揺り動かされ、彼らには大変な戸惑いと心理的混乱を引き起こすことがよくあります。例えば、ある男性では顎ひげが伸びてきますと、それに対して過度に反応して一本一本きれいに抜き取るうとします。とても強迫的に反応します。このような自分の身体的変化をどう受け止めてよいかわからないため引き抜いてしまうわけです。女性では、第二次性徴の身体的変化に対して男性とは異なった受け止め方、反応を示すことが多いように思います。第二次性徴の変化に対してある女性はそれを期待して心待ちにしているという例もあります。時には心身症反応を示すことがあります。それがうまく受け止められると、自分が女性であるということのある種のプライドの獲得へつながって心理的にとてもしっかりとしてくるということもありません。ただ、このような変化を受け止めていくことは誰にとってもたやすいことではありません。ましてや自閉症の人々

にとつては想像できないほどの試練になっているらう  
と思います。

## 六、自閉症の人々の思春期発達—母子分離—

このように思春期発達の課題は彼らにとつても大変なこと  
なのですが、その中でも彼らへの発達援助を考える上で  
最も重要な治療的課題は、母子分離をめぐる問題だろうと  
思います。彼らを育てていくことは大変手のかかることで  
すから、母と子の関係は必然的に密度の高いものになりま  
す。そうした関係から距離をもっていくことは容易なこと  
ではありません。したがって両者の間で様々な心理的問題  
が露呈してくるということも否定できない事実であります。

思春期に入って洗淨強迫、手洗いを何度も何度もやらな  
いと気が済まないという症状を繰り返す男の子がいました。  
彼が成人になってまもなくある施設に入ることになったん  
ですね。するとその子のお母さんもとて強く反応された  
んです。それまでとても密接な心理的つながりをもってい  
た母子でしたので、二人ともこうした物理的に切り離され  
ることに強い心理的動揺が引き起こされてしまったのでしょ  
う。彼は十二指腸潰瘍という心身症を呈して、下血までみ  
られるようになりました。この親子にどう援助したらよい  
だろうかと考えたわけです。家族と面接をしてみると、彼

は母親をとて頼っているけれどもその一方では父親との  
関わりをどこかでとて求めているんだなということを感じ  
させるところがありました。外泊中にお父さんが散歩に  
付き合ってくれるとそれをとて楽しみにしている。父親  
と散歩することで広がっていくこと、そういうことが彼に  
とつてこの時期とて魅力的なものになっているように思  
われました。ただ、お母さんとの間ではアンビバレントで  
複雑な心理状態を示していました。

そこで私はご夫婦一緒に面接をすることにしました。そ  
こでお父さんのことをいろいろと話し合っていたのです。  
そうすると、お母さんはこの子の心の問題が自分達の今の  
心の状態に対する反応の結果であるとは到底思えないと強  
く主張されました。お母さん自身が抱えているご主人との  
関係に対する様々な不満や子どもへの強い思いが、まさか  
自分の子どもには理解できるはずはないとおっしゃるので  
す。自閉症の子どもに自分の心の内面の問題などわかるはず  
はないという気持ちが強かったのですね。私はそのあたり  
の心理的問題を面接の中で少しずつ解き明かしながら、  
ご主人と一緒に考えて話し合うように心掛けました。  
お母さん自身の心の悩みをご主人との間で共有していくと  
いう作業を面接の中で進めていきました。ご主人は奥さん



に対して、いつも子どものことしか面倒をみないという強い不満をおっしゃいました。このような形で夫婦間のコミュニケーションが次第に深まっていったのです。すると驚いたことに彼の強迫症状は随分と軽くなっていったのです。このようなことを経験してみると、どうもわれわれは子どもがまさか大人の内面の心理的な側面を感じ取っていないだろうと決めつけているきらいがあるのではないかと思うようになってきました。

また別の男の子の例ですが、彼が中学校を卒業した頃、パニックが酷くなつて私が当時勤めていた福岡大病院精神科に入院させて治療を担当したことがあります。彼はひとりっ子で、お母さんはとても熱心にこの子の育児をして来られた方でした。ただ、子どもの行動に対してとても敏感に反応される不安定なところがありました。そのお母さんがなんと十五年ぶりに二人目のお子さんを出産されたんです。とても健康で元気のお子さんであったので、お母さんは育児の楽しさを初めて体験されたんでしょう。そのお陰もあってお母さん自身が母親らしさを身につけてこられた。そうしたプロセスがあって子どもは見違えるほどに変化していききました。この母子の例をみても、母と子の心の繋がりの深さを感じることができました。

別の例ですが、中学を卒業して養護学校の高等部に入学した男の子がいました。高等部が全寮制であったために、お母さんと子どもとの間で複雑な心理状態になってしまいました。この例では治療はかなり難渋して思うようにはいきませんでした。お母さんの生活の背景には随分と複雑な思いが存在していることが次第に明らかになっていった例です。この子が生まれた産院で夜スタッフがちょっと目を離していた時にこの子が何か誤飲して数分間呼吸困難でチアノーゼを呈したことがあったというのです。医療過誤といつていいかもしれません。このことが今の子どもとの状態と何らかの因果関係があったかもしれませんが。このような大変な経験をされていたことがわかりました。またご自分の兄弟の一人が以前自殺されていたことも偶然わかりました。このようにとても根の深い悩みがお母さんの中に存在していることがわかりました。このような大変さをじつとご自分ひとりで抱え込んでおられる様子でした。お母さんが子どもにとっても強い思いを抱きながら接しておられる様子がこちらにひしひしと伝わってくるような状態でした。ある夜、子どもの様子を見るために彼の部屋に入ったら、彼が自室でマスターベーションをしているのを目にしてしまったそうです。お母さんは大層びっくりして厳しく注意

してしまった。そのために彼はマスターベーションに対して強い罪悪感をいだくようになったんですね。その後は「してはいけません」というせりふを繰り返しながらマスターベーションを繰り返すようになったんです。さらに驚いたことには、それまで好きでみていたテレビニュースの番組で女性キャスターが話しはじめると途端にテレビのスイッチで音声を消してしまうようになった。男性キャスターが話しだすと再び音声を元に戻すということをやりはじめたのです。彼のそれまでの好みから判断すると、本当は逆のことをしたかったんだらうと思うのです。男性の音声を聞かなくて女性の音声を聞きたかったんだらうと思うのです。しかし、実際はその逆をしていたんです。なぜこんなことをしたんでしょうか。異性に関心を抱いていること自体が彼にとつては罪悪感を抱かせることになってしまっているがために、それを否定したいがためにこのような行動をとらざるを得なかったと思うのです。マスターベーションに対する罪悪感が高じて、異性への憧憬といった感情さえも否認してしまうまでになったんだらうと推測されるのです。

### 七、自閉症の人々の思春期発達—自己意識—

ついで思春期以降の一生を決定づけるであろう大きな発達課題としての自己意識、自分のアイデンティティの問題

について考えてみたいと思います。

思春期に入るまでは、それまでは親からこうなって欲しい、こうしなさい、ああしなさい、これは駄目よといった親からの期待や願望を取り入れることによって、自分のあべき姿というものを作り、そのようなレールの上に乗って生きていこうと努力します。しかし、思春期に入ると、漠然としながらもそのような生き方に対していろいろとしっくりこない、どことなく不安な心の揺れ動きが起るようになります。そして次第に自分なりにやってみようという感情が心の中から沸き起こってきます。そうした際に、自分を周囲の人と比べて相対化し、客観化していくことにより、自分らしさをしだいに発見し見出ししていくこととなります。自分なりに理想とする人物を発見したり創造したりして自分なりの指針とするわけでしょうが、自閉症の人々にとつてはこのような作業はなかなか大変なことであることは想像に難くありません。しかし、彼らも彼らなりに理想とするモデルを求めていきます。われわれが感心するのは、本日表彰された方々もそうですが、非常に高い理想像を持ちつづけている方が多いことです。自我理想という言葉でよくいわれますが、自分がこうありたい、こうあらねばならないといった理想像をととても強い形で持ち続

けている方が多いと思います。それはとても素晴らしいことだと思えます。しかし、それがあまりにも強すぎて現実とのギャップが大きすぎると彼らは両者のギャップの中で混乱していきます。自分の理想に近い人物や自分の心を和らげ自分の心の指針となってくれるような身近な存在があった場合にはそういう人に対して熱い思いを寄せ理想化し、その人のいうことであれば素直に取り入れて行動する、そんな姿をよく見せてくれます。自閉症の人々の自己意識というものを彼らなりに形成していくプロセスとしてこのような場合が望ましい形としてあるように思います。いわゆる「健常者」の人々のように色々な人達を対象化し、自分を相対化することを通して自分らしさを身につけていくということとはなかなか容易なことではないものですから、下手をするとその理想化した姿をあまりにも忠実に求めすぎるとためにややもすると過剰適応してしまいます。車でいえば遊びのないハンドルのような状態になってしまい、息切れして頓挫してしまふというある種の病的な破綻状態を来たすことがあります。そのような危険性を念頭に入れておくことが彼らの援助を考える際にとても必要だと思えます。

#### 八、自閉症の人々の思春期発達―性同一性の獲得―

思春期の発達課題でおそらくもっとも深刻な問題となり

やすいのは、先程も話しました身体の変化、性にまつわる問題だろうと思えます。障害児にとつての性の問題というと、一般的には性衝動や性欲の問題として捉えられやすいところがあります。しかし、性にまつわる問題をそうした個人の生物学的次元の問題で片づけると性の発達というのが見えなくなってしまふ危険性が高くなると思えます。ではどうした観点が必要かと申しますと、性同一性、ジェンダー・アイデンティティということだろうと思えます。

性同一性とは分かりやすくいえば、男性であれば男らしさ、女性であれば女らしさというものをどう自分の中に作っていくか、ということですが。彼らが性同一性をめぐる混乱をどのような形で呈しているかをみると、とても興味深いことがわかります。例えば、ある男の子でこんなことがありました。小学校五年の時、「あら、いやだわ」といったような女言葉を使うということで問題化して私のところに親子で相談に來られました。以前からの女の子が使うようなせりふや立ち居振る舞いが小学校高学年になつても自分で直せない状態にあるということでした。子ども自身はとも現在では自閉症とは思えないほどに良好な発達経過を辿っていたのですが、どうしてこうなつたのか、話を聞くなかでしだいに明らかになっていきました。幼児期、養育に熱

心であったお父さんが、当時とてももてはやされていた行動療法の手法を用いて、非常に厳密に訓練をなさったんですね。それはおそらくある程度の成果をもたらしたかもしませんが、それによって彼は男性恐怖症になってしまいました。ある男性の姿をみた途端に、すばやく逃げだしてしまうほどになってしまったんです。そのため、小学校に入ってから男性には接近できず、いつも女の子の中に入って遊んでいたんですね。低学年の時は女の子も面白がって彼をとて可愛がってくれたり、世話を焼いてくれたんです。アイドル的存在といえる状態だったんです。しかし、高学年になるにつれ、女の子は女の子同士で集団を作るようになっていきますが、それでも彼は女の子の中に入っていくこうとするものですから、周囲から排除されそうになるわけです。彼はどうしてそうされるか分かっていない。そのため、彼はますます彼女らに気に入られようとして女の子らしい振る舞いをしてしまうという悪循環に陥ってしまっただことがわかりました。この時期は男女各々が同性の仲間同士の集団を作り、その中で男の子らしく、女の子らしく振る舞うようになっていきます。その発達段階でのつまづきとして彼の問題を理解することができます。そうかと思うと、周囲の男の子達がひどく乱暴な言葉づかいをし、当

時かなり荒れていた学校にいた男の子が、そのような振る舞いを表面的に熱心に取り入れていたんです。そのような振る舞いを私の診察場面でも区別無く見せるわけです。私とのやりとりをべらんめー調でするわけです。それはとても滑稽な仕種にみえたのですが、状況場面によって使い分けるといことが難しかったのですね。以上述べたようなことは性同一性のなかでも性役割同一性の問題といわれるものです。

もうひとつの問題は、異性に対する憧憬や接近に関することです。以前は自閉症の子ども達は異性に対する興味や関心はもたないのではないかと考えられていた時期がありました。性衝動などもないのではないかとということもいわれた時期がありました。実際は彼らも異性に対する憧れや関心は強く持つようになります。そして異性を見る目も確かです。ただ、それを彼らは少し屈折した形で表現してしまふということがあります。対人関係を持つことに大きな困難をもつがゆえにそうならざるえないのです。

ある女性では幼児期から非常に興味を持っていた文字や漢字を生き物のように捉えて、自分の憧れの異性の対象としてみるようになっていました。ある例ではそうした性衝動や異性への関心が好ましい形で直接人物対象へと向ける

ことが大変困難であるために、性倒錯的な振る舞いという姿を見せることがあります。そのように性同一性をめぐる問題はいろいろあるわけですが、彼らの思春期の発達全体を眺めた時に、われわれが考えなくてはいけないことは、けっして彼らの思春期発達そのものが特殊なものではなく、われわれと同じような思春期の発達課題を抱えて発達を繰り広げているのだということです。

しかし、彼らが生まれて間もない頃から母と子の間での情緒的なつながりさえ思うようには成立しない、そうした重いハンディキャップを背負っているために、彼らの思春期発達の様相は表面的に見てしまうと、はなはだ不可解な姿を呈しているかもしれせん。最も身近な存在である両親にとっても彼らの思春期発達は非常に不可解なものに映っていることが少なくないと思います。したがって思春期の入口にさしかかった時期にご両親に対して思春期発達のオリエンテーションをするといった試みはとて大切なように思います。そうしたオリエンテーションを受けることによって初めて彼らの心の内面の姿を親御さん自身の心で感じ取って確かめるということができるようになっていくと思うのです。

## 九、関係性について

昨今の自閉症理解は、脳障害というものをあまりにも強調しすぎてしまい、彼らを心をもつ存在として理解しているという姿勢が乏しいことを私はとても残念に思っています。脳障害とか学習能力障害といったことが強調されすぎて、一面的な色眼鏡で彼らを見てしまっているように思われます。彼らの思春期発達を今日お話ししましたのも、彼らの内面を見るように努めることの大切さを強調したかったのです。彼らも含めてわれわれ人間存在は、具体的には母親との関係、父親との関係、その他の様々な人々との関係の中で、発達が展開されていくものです。そのような関係性の中でわれわれの発達は時に離散し、また時にはスムーズに通過し、ある時期には大変な混乱に陥るということだろうと思います。つまり、彼らの発達も当然のことながらいろいろな人々との交流の中でひとつひとつの積み重ねの中で、良い意味でも悪い意味でも影響を受けながら、しだいに個性的な存在へとつながっていくのだらうと思います。よって大切なことは、彼らの発達を考える際に、決して彼らのみを取り出してみるのはなく、子どもとわれわれとの関係のあり方を視座に置いてみていくことを基本に置くことだろうと思います。そうすることによって初め

て、彼らへの望ましい援助の方針が立つのではないかと思うのです。このことを私は「関係性」ということばで捉えようと思います。対人関係のありようといった意味合いです。最近よく使用されている母子相互作用といった言葉とは違った意味で用いています。相互作用という場合、その多くは目で見える観察可能な行動のみを捉えて使用されることが多いようです。しかし、実際の親と子の関係というのはそんなに客観的に第三者がちょっと距離を持って、たとえばビデオカメラを通して全容が捉えられるような性質のものではありません。今までお話ししてきたように、親の思いや子どもの思いは目に見えない情動の世界の中で展開され、そういうものが強い力となって両者の関係性を規定し動かしているという気がします。それはわれわれにとつては捉えがたい側面であると思います。しかし、このようなことは子育てをとつてみた場合とても重要な側面であることに容易に気づきます。育児はきわめて文化的な営みであるときよくいわれますが、子育ての際に情動的な側面が大きな力を持っていることは赤ん坊との関わりを考えるときよく理解出来ると思います。話をわかりやすくするためにある具体例をお話ししたいと思います。

#### 十、自閉症の人々の心と親の心のつながり

二十五歳の時に私のところに相談に来られたある女性の自閉症の人がいらっしやいました。彼女が高校二年の時、お父さんは癌で亡くられています。実は彼女が苦しんでいる主訴はとても興味深いものでした。周囲の人々がみなきれいで自分だけ醜い、自分は身も心も汚い、みんなは輝いてみえる、というものでした。こんなことを毎回の面接でメモに書いて私に手渡すんですね。醜貌恐怖、容姿コンプレックスのとても強い状態だったんですね。私はこの主訴を聞いて随分と頭をひねりました。しかし、なかなかその謎は解けませんでした。とにかくお母さんと娘さんの関係は大変ひどい冷戦状態で、二人の間には強い心理的緊張が感じられました。お母さんはとにかくきれいで、自分は醜い、お母さんに限らず周囲の人はみんなきれいだというわけです。お母さんに対する敵意、攻撃性はとても強くて、お母さんは毎日の生活の中でこの娘にいつ不意に襲われるかもしれないという不安と恐怖に苛まれ、とても深刻な状況に発展していました。どうしたらこのような状況を打開できるだろうかと随分と私も苦労しました。お母さんは六十歳位の方でしたが、同席した女性サイコロジストがお母さんは四十歳代後半位に見えたと言っていました。そ

れほど若くきれいな方でした。したがって彼女の気持ちは多少なりとも分かるのですが、周囲の人々みんながきれいにみえるという状態にまで発展していることが了解困難なものでした。

しかし、お母さんとの面接を進めていくなかでしだいに彼女の苦悩が始まった契機が分かってきました。高校二年の時の体育の時間に、当時彼女の唯一の仲良しであった友人と一緒に着替えをしていたら、偶然友達の乳房が第二次性徴によって女性らしくなっていることを発見したんですね。それを見て自分はそうならない、なぜなんだろうと疑問に思うと同時にひどいショックを受けたというのです。このことがきっかけでそれからこの娘の様子がおかしくなったということでした。でもこれほどまでにショックを受けた背景にはある事情がありました。彼女は幼児期から母親の化粧の様子をよく眺めてはその真似事をしていたといえます。そして学童期に描いたある人物画にもきれいに化粧をして目鼻だちのキリッとした女性が描かれていました。自分が美しくなりたい、女性らしくなりたいという強い思いが感じられました。お母さんがいくつになっても身だしなみや美しさを失わずに心を配っておられることも今の彼女に何らかの影響を及ぼしていることも確かでしょう。

う。そういった強い思いが幼いころからあったがために、今回のことは大きなショックにつながったのだろうと思います。しかし、それだけでは彼女の病的なまでの思い込みは理解できないように思います。

治療が進展していくなかで、お母さんはしだいに娘との緊張関係に疲れ果て、抑うつ状態を呈するまでになっていかれました。治療を進めていく際に、このことはある意味では避けて通れない過程ですが、そのプロセスの中で私はお母さんとの面接を進めていきました。すると次にこのようなことがわかってきました。娘さんが思春期の不安の真っ只中にいた時、先程お話ししたご主人の闘病生活のためにお母さんは看病に忙殺されていたんですね。ただこのお母さんは大変な頑張り屋さんで、今日というスーパーウーマンのような人だったんですね。だから娘の学習指導にも手抜きすることなく取り組んでいかれたんです。しかし、今振り返ってみると、娘の思春期不安に対しては全く心を寄せることができなかったということを現在になってやっと振り返ることができるようになりました。このことは大変つらい作業だったんだろうと思います。このようなことがお母さんの口から直接語られたのです。さらに治療が進展していくにつれて、お母さん自身の思春期時代が蘇っ

てきたのです。それはお母さんが二十歳の頃の独身時代にまで逆上っていききました。終戦間もない昭和三十年の頃、お母さんは当時激しいダイエットをやっていたというのです。お母さん自身がどうも女性らしい体型になっていく自分を受け止めることに強い心理的葛藤状態にあったことが分かったのです。当時はまだ食糧事情の悪い時期でしたから、現代の若い女性によくみられるようなダイエット志向などまったくない時代だったといえます。そんな時代であってもダイエットをやっていたというのは、当時の人々にはとても理解できにくい行動だったようです。今でもお母さんは女性らしいふっくらした体型の人をみると嫌悪感を抱くとおっしゃっているほどですからよほどのことだったろうと想像します。このようなお母さん自身の思春期での葛藤を聞いて初めて娘さんの苦悩がやっと理解可能になったように思いました。娘さんが身体の変化を受け止めることに苦悩したその背景に、お母さん自身のこのような思春期体験が強く影響を与えていたことがわかります。以上のようなことが面接の中でお母さんの口から語られるようになって、驚くべきことが起こったのです。それまで他人を直接見たりすることができず、外出さえままならない状態であった娘さんが、お母さんと買い物をするようになり、病院に

来たならそれまで頑に拒否していた採血を自発的に受けるまでになりました。そして嫌がっていた歯医者に治療を受けに行くまでになったのです。明らかに敵対心を見せていたお母さんと楽しく行動することができるようになっていったのです。このような娘の変化を目の当たりにしてお母さんは「娘と私は一心同体なんですね」と実感を込めておっしゃいました。おそらくお母さんもやっと娘の気持ちがあるがままに素直に自分の心の中に感じ取り、受け止めることができるようになったんだろうと思います。そうすることによって娘さんの気持ちも氷解していったんだろうと思いました。

なぜこのような話をしたかと申しますと、人間存在というものは、いろいろな歴史を背負って現在を生きている、そして子どもを育てる際に、そのような歴史性をもつ存在として育児の中でそのような歴史性が展開されていくんだろうと思うのです。育児がきわめて文化的営みであるということはこのことを指しているんだろうと思います。われわれは全く意識していないところで育児という作業のなかで必然的に子どもにこのような影響力をもって接しているということがいえると思うのです。そう考えると人間とは本当に因果な存在だと思わざるをえません。そのように長



い歴史を背負った存在としてわれわれは日頃子どもに接しているんですね。そういうことを無視して子どもと関わり合うということはありえないという気がするわけです。

一般的に、われわれは大人で、彼らは子ども、自閉症の子どもは障害を持っている子どもというふうに捉えがちです。しかし、大人は完全な存在で子どもは不完全で未熟な存在というふうには捉えることはできないと思うのです。

われわれは子どもの前では、大人としてよりも親として存在しています。自分が親として育つことは、子どもが育つ過程と並行して進展していきます。子どもが成長していくプロセスの中でわれわれも親として成長し親らしくなっていくというふうには捉えなくてはいけないと思います。したがって彼らを個別に取り上げてどんな障害がある、こんな障害がある、こんなむずかしさがあるというふうにはばかり捉えていたのでは、彼らに対する冒瀆ではないかとさえ思ったりします。言葉を変えて言えば、われわれも彼らとの関わりを通して親として親らしくなっていくかなくてはならないということだろうという気がします。

#### 十一、乳幼児期における早期の介入について

今まで思春期発達について考えて来ましたが、自閉症の人々の心の発達とその援助を考える上では思春期にも増し

て重要になるのは、乳幼児期早期だろうと思います。今までお話ししてきたことはけっして思春期特有なことではなくて彼らの発達全体を通していえることだと思えます。

最近経験した例でお話をしてみましょう。三歳少し前に相談に来られたある男のお子さんは半年前から明らかに自閉的で強迫的なこだわりがみられるようになっていました。ただ一歳半頃には二語文が話せるほどの発達を遂げていましたので、いわゆる折れ線現象を呈していたんだろうと思えました。この親子に最初にお会いした時、とても気になったのは、お母さんにこの子をどことなく受け入れがたいような拒絶したくなるようなそんな姿が感じ取られたことでした。これはどうも単純ではないなと思いつながり話を聞いていきますと次のようなことがわかってきました。この子が一歳半になった頃第二子を妊娠したのですが、その頃ご主人が浮気をしたため、お母さんは心理的な混乱状態に陥ってしまったのです。悪阻がひどい時にはこの子の便を見るとひどい嫌悪感が引き起こされ、強い嘔吐が誘発されるようになりました。それはおそらくご主人に対するネガティブな感情や嫌悪感が子どもに映し出され、そのため子どもの排泄物にもひどい嫌悪感が生じたのであろうと思えます。このようにして明らかにお母さんのネガティブな

感情が引き金となって子どもは折れ線現象を呈したことがわかりました。そこで私は今までにお話ししたようなお母さんの心理的な側面のカウンセリングを通しての援助を行うとともに、お母さんと子どもとの心の触れ合いがうまく展開できるように母子ユニットでの治療を行うことにしました。このようにして母子への援助を行っていきますと、治療の初期には子どもがさかんにお母さんに注意を引くような行動を示しているにもかかわらず、お母さんはそのことを感じ取れないんですね。子どもがいろんなことを試してもお母さんは「だめじゃないの」といつも子どもの行動を評価してしまふんですね。子どもにとってその時のお母さんの存在は自分を伸び伸びと発揮しそれを受け止めてくれるような存在として機能していかないわけです。しかし、治療が進展していってお母さん自身が心の健康状態を取り戻していくにつれ、しだいに子どもの心の動きに同調できるようにになっていきました。まもなく子どもはお母さんの姿をちょっとでも見失うと、ひどいパニックを起こしてお母さんを捜し回るようになっていきました。そしてお母さんにべったりくっついて一時も離れられないようになっていきました。このようにしてお母さんとの交流が深まっていくにつれ、子どもはお母さんが目に見える範囲でそばに

いてくれさえすれば安心して伸び伸びと一人で遊べるようになっていったのです。このように母子関係が深まっていきますと、遊びのなかでお母さんは子どもの動きに合わせて、ごく自然に声が出るようになってきました。たとえばボールをころがしながら「ゴロゴロ、ゴロゴロ……」とか、思わず歓声を上げるとか、お母さん自身の身体の動きに合わせた生き生きとした発声が多く聞かれるようになっていきました。このように母子交流が展開していきますと、子どもは今までに見せたことのないような生き生きとした動きをどんどん見せるようになっていきました。

この二人の動きの変化を見ていきますと、乳幼児期早期の段階での親の思いと子どもの思いというものは、非常に深いところであつながら影響し合っているということが分かります。私は今年の春、現在の職場に赴任してから、一歳半頃に対人関係の発達に問題を感じさせるお子さんに何人かお会いしましたが、そのような親子に合ってみるとお母さんが子どもに対していろいろな事情からどことなく受け入れがたいような心理状態にある、そんなお母さんの思いがどことなく感じられることが多いことに気づきました。どうも子どもの相手をするのをどこかで負担に感じておられるんですね。たとえば、胃腸の調子が悪くて子どもの相

手を思うようにできないとか、腰の具合が悪くてできないとか、お母さん自身が自分を持って余っていて子どもの気持ちに十分に寄り添っていけない、そんな状態にあるんですね。身体の調子が悪いので、マンションの五階の部屋までとでも子どもを抱いてやれないので、無理やり歩かせていたといった例もありました。ただ幸いお父さんがとても共感的で協力的な方でしたので、一緒に考えていくことにより、お母さんは随分と元氣になられ、ごく短期間で急速に母子関係は深まっていき、子どもはお母さんにべったりとくっついて離れなくなっていました。それまでは私に抵抗なく抱かれていたのに、そうなると私が近づいて抱こうと手を出しても、私の手を払いのけるほどになりました。治療的介入してみると、比較的容易に母子関係は改善を示していくことが分かってきたのですが、この時期はこのように微妙な母子関係にあるということをお教えされるわけです。子どもはわれわれの気づかないところで親の心の状態を感じ取ってそれに敏感に反応して行動していることがわかります。一歳半頃の時期が母子関係の発達にとって大変微妙な段階にあることをいままらのように教えられるのです。

このようなお話をしていきますと、小林は二十年ほど前  
の自閉症心因論を今になって再び強調するのかというふう

に受け止められる方がいらっしゃるのではないかと危惧しております。最後にその点について付け加えておきたいと思えます。

たしかに明らかに脳障害が基盤にあつて自閉的になってこられるお子さんもいらっしゃいます。たとえば、ウェスト症候群という乳幼児期に発症するてんかん性の神経疾患があり、そのため治療を受けていた女の子がいました。その子は二歳前後からしだいに言葉をしゃべらなくなり、折れ線現象を呈していきました。お母さんは保母さんをしていた方でお子さんの相手をとてもうまく、実に楽しそうにされ、どうみても氣になる点はみられませんでした。しばらくお会いしてお母さんがある日こんなことを話してくださいました。「ある時期、二歳上の姉のピアノ発表会の練習のために、お母さんは姉の相手に氣を取られ、この子への関心が薄れた時期があった。この時期だけはどうも自分の心はこの子の方に向いていなかったように思う。どうもそれがきっかけでこの子はおかしくなったように思う」とおっしゃいました。明らかに脳の脆弱性を持っているお子さんでしたが、もしもお母さんが常にこの子への強い思いをかけ続けておられたらひょっとしたらこのようにはならなかったかもしれないという氣もしました。このことは

けっしてお母さんへの非難として申し上げているのではありません。ただ、なんらかの生物学的脆弱性をもって生まれた子どもたちに接する場合には、養育者は非常に強い思い入れをもった形で積極的子どもに対して関与をしていくことがとても大切なように思うのです。そのことが可能になれば、養育者との関係性が好ましい形で展開していくだろうと期待されるわけです。もしも積極的な関与が乏しい場合には子どもの方に養育者への積極的な関わりを求めようとする行動が期待できず、母子関係がいい方向に展開していかないこともあるのではないかと思います。

おわりに

以上いろいろとお話ししてきましたが、自閉症といわれるお子さんに接する場合に一番大切なことは何かを私なりにまとめてみたいと思います。

自閉症のお子さんは自分と他者、母親と自分、そうした関係性というものの認識が非常に育ちにくいところに最大の問題があると思います。たとえ年長になってほとんど問題を感ぜさせないほどに成長したお子さんでも、乳幼児期にこのような関係性の問題をもっていった場合は、思春期のような混乱しやすい状況に陥りますと、普段は感じ取ることができなかったような心理的基盤の弱さが様々な形で露

呈してくるということが少なくないのではないかと思うのです。その弱さというのは、今、話しましたような自己と他者との関係性というものが基本的なところで確実に捉えられていないがために、自己と他者との関係性が曖昧模糊とした状態になってしまふんだらうと思うのです。実は赤ん坊がそうなんですけども、自分というものを他者を通して、例えば養育者である母親を通して感じ取るとか、自分の中に起こってきたことを他者を通して感じ取るとか、自分と他者というものが渾然一体となって融合した形で捉えられやすいという、そんな世界に生きているんだらうと想像するのです。したがって、こんな世界に生きていると、自分の中に起こっている嫌な感情であるはずなのに、それをあたかも外界の現象であるかのようにとらえたり、自分がよくわからない漠然とした不安というものを親を通してどういうことなのかを感じ取ることににより、自分の周りの世界の出来事を感じ取り意味付けていく、そんな世界に彼らは生きているのではないかと気がします。

よって彼らへの心の発達の援助ということを考えた際にもっとも大切なことは、重要な他者を通して彼らは自分の中に起こっていること、周りの世界で起こっていることの意味付けをおこなっていく。そのような営みを通して懸命

に生きているんだということを認識することだろうと思  
います。自分の周りで不可解なことが起こっている場合には  
彼らは自分にとって最も重要な他者である養育者、主にお  
母さんですが、その母親を通して今起こっている出来事を

意味付けて判断しているように思います。たとえば今は大  
丈夫なのか、安全なのか、危険なのか、といったことを重  
要な他者を通して判断していると思います。したがって  
つも自分の中に不可解な耐えがたい恐怖心を引き起こすよ  
うな日々の状況の中で生きている彼らが、もしそれに耐え  
られるとするならば、それは自分にとってきわめて重要な  
他者、養育者である母親が「大丈夫だよ」という思いを彼  
らとの間で共有できるような関係があるからだろうと思  
います。それが保証されるならば、彼らはこれからも生きて  
いこうという勇氣が湧いてくるのだらうと思います。母親  
をかがり火としながら前進し生きていけるのではないでし  
ょうか。このことは昨今の学問的な言葉で表現しますと、母  
親参照機能ということになります。参照というのは参考に  
するということを意味しますが、自分の周りで起こったこ  
とが安心できることなのか、危険なことであるのか、その  
判断を知る手掛かりを母親が醸し出す雰囲気、情動的な世  
界から得ているのだらうと思えます。このような関係性が

両者の間でしっかりと備わっていれば、昨今のすぐれた自  
閉症の治療教育プログラムをステップ・バイ・ステップで  
着実にやっていけば、彼らは時間の長短は別にしても確実  
に歩んでいけると思うのです。

自閉症の子どものなかで一生活し言葉を獲得できない方  
がいっぱいいます。しかし、ことばを持たないから他  
者との間で理解しあう関係ができないかというところでは  
ありません。今日表彰された方の親御さんの手記を拝見し  
ていてもつくづく感じます。自由な心で子どもと関わって  
いき子ども心の動きにこちらが合わせていくという関係  
ができ、そういう関係を基盤にして両者の間でいろんなこ  
とを体験していけば、お母さんはいつの間にかごく自然な  
形でその体験の意味をなんらかの形で子どもに伝えること  
になっていくと思うのです。発達する力が弱い、なんらか  
の生物学的脆弱性を持って生まれた子どもに接する場合に  
は、養育者ないし療育者は彼らの心の動きに共に触れ合う  
ような心の状態を保ちながら、こちら側から積極的な形で  
思い入れを込めながら彼らに接していくという姿勢がとて  
も大切だろうと思うのです。彼らの心の発達を長い目でみ  
た場合、このことが一番の鍵になるのではないか、そんな  
気がしております。ご静聴ありがとうございました。